

氏名	こいけ しほこ <b>小池 志保子</b>
学位(専攻分野)	博士(工学)
学位記番号	博甲第 602 号
学位授与の日付	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	<b>日本の公設美術館における空間構成の変容に関する研究</b>
審査委員	(主査)教授 中川 理 教授 石田潤一郎 教授 長坂 大 教授 並木誠士

### 論文内容の要旨

日本における美術館建築の変遷を、一定規模以上の地方自治体が設立した 109 館の美術館を分析対象として、多様な視点から分析を行った。

第 1 章では、公設美術館の空間構成について、来館者が利用する部分の面積比を用いることで、その変化を統計的に明らかにした。公設美術館の新築数は 1980 年代までは増加し、1980 年代をピークに減少に転じたこと、規模は戦後一貫して大型化の傾向にあること、1960 年代以前においては、美術品を鑑賞する場である展示空間そのものが空間構成の中核となった[展示空間中核型]という特徴をもった公設美術館群がみられたことなどを明らかにした。

第 2 章では、来館者が利用するすべての部分に最もアクセスしやすい空間、すなわち、来館者の移動の起点となる空間を特定し、そこから空間構成を考察した。来館者の移動の起点となる空間がどのような空間であるかによって、空間構成の類型化を、スペース・シンタックス理論を用いて試みた。同理論の Convex Analysis によって空間構成について解析し、公設美術館における来館者の行動の起点となる空間、来館者中核空間(A)を特定した。その上で、最も面積が大きなホール(B)、エントランスホール(C)、階段(K)、廊下など(P)による位相構成により、ABC 型、ABC' 型、AB-C 型、AC-B 型、AK 型、AP 型の 6 つの類型があることを導いた。

第 3 章では、前の 2 つの章を受けて、そこで明らかになった空間構成の変遷を踏まえながら、公設美術館を設計した建築家の言説に着目し、時代ごとにどのようなことが語られていたのかを考察した。各年代を通して美術館の記念碑性に関する言説がみられた。記念碑性を否定する館の多くは、来館者中核空間と最大のホールやエントランスホールが一致せず、回遊を促すと考えられる AP 型の平面を持つという傾向が読み取れた。1970 年代には、類型 AP 型が中心で、廊下や階段という移動のための空間が来館者中核空間であるという特徴がみられ、そこには作家や市民の創造的な活動を誘発しようとする意図が込められていた。1980 年代以降の公設美術館では開かれた美術館が目指されたが、その空間構成には年代ごとの違いがみられた。1980 年代では、開かれた美術館の実現のために、ホール空間が設けられ、その空間が来館者の行動の起点となっていた。1990 年代には中心がホール空間ではなくなる。2000 年代に入ると、美術館という制度の枠組みを広げようとする言説がみられるようになる。そこでは、来館者中核空間となるホール空間もしくは動線空間は、その空間と他の空間との関係で語られるのではなく、外部環境との関

係において計画されるようになったことを明らかにした。

## 論文審査の結果の要旨

日本の美術館をとりまく社会的環境が大きく変わる中で、美術館建築、とりわけ公設美術館建築の空間構成も大きく変容してきた。その変容は、日本の文化的状況をきわめてよく反映してゐるとなっており、実際に、大きな変容を遂げる契機となった美術館建築は、建築賞の受賞作品にもなるなど、建築設計界でもとりわけ注目される存在になってきた。その意味で、建築のビルディングタイプの中でも、美術館建築の変化に着目して分析することは意義が大きい。

しかし、その変容の過程を客観的に分析することは難しい。設置者、建築家、学芸員、作品を提供する美術家、そして利用者など、美術館建築建設に関わる関係者は多岐にわたり、美術館建築は、その理念や利害の調整のうえに成立しているからだ。そこで、この研究では、そうしたさまざまな立場からの美術館建築への企図が集約された結果としての物理的な空間構成にもっぱら着目し、それを手がかりに美術館建築の変容の実態を明らかにしようとした。

一つは、基礎的な分析として、構成される部屋ごとの面積比率などから統計的に空間構成の変化を明らかにしている。これにより、1980年代以降には、多様な空間構成を持つ[多様化型]と、展示空間が分散傾向をもつ[展示空間分散型]の2つのタイプが主流になっていくという実態を把握している。

また、もう一つの分析手法は、来館者の移動の起点となる空間を特定し、それを中核にした空間構成を抽象的に把握するものである。これは、美術館建築の変容においては、来館者が把握する空間の構成の変化が最も重要であると考えられるからである。そこで、ここではスペース・シンタックスの手法を用いて、空間構成を位相幾何学的に抽象化して把握し、その相互の関係性から変化の類型化を明らかにしている。その結果として、来館者中核空間を核とした6つの変容類型を明らかにした。

そして、こうした物理的空间構成を統計的・位相幾何学的に分析した結果として把握できた変化の類型化を、それを設計した建築家の言説と照応することで、さらに検証している。この作業により、1990年代以降には、鑑賞経路の回遊性やそこでの体験が重要視されるようになり、一つの類型が作り出されたこと、あるいは、2000年代に入ると、美術館という制度の枠組みを広げようとして、来館者中核空間が他の空間との関係で語られるのではなく、外部環境との関係において計画されるようになったことなどを明らかにした。

この研究は、以上のように美術館建築の変容を定量的な手法を中心に分析することで、客観的に示すことに成功している。その意味で、建築学に大きく貢献する研究であると判断できる。

本論文の内容は、以下の学術学会誌の査読論文として公表されている（2は印刷中）。

1. 小池志保子、中川理「空間構成からみた日本の公設美術館の変化に関する考察」日本建築学会  
計画系論文集, No.659, pp.221-227, 2011年1月
2. 小池志保子、中川理「スペース・シンタックス理論を用いた日本の公設美術館の空間構成に関する考察」日本建築学会計画系論文集, No.662, 2011年4月